

# 国際会議 〈強制と同意 「大衆独裁」の比較研究〉 はじめに

岩崎 稔

海外事情研究所は、複数の科学研究費に基づく研究活動や、大小のさまざまな自律的研究会／ワークショップに、融通無碍な形で基盤と環境を提供してきている。その多岐にわたるネットワークのひとつに、海外の五つの研究機関と連携して進める共同研究プロジェクト『強制と同意——大衆独裁の比較研究』がある。その際、本研究所のパートナーとなったのは、ドイツ現代史研究センター（ポツダム）、ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所（モスクワ）、グラモガン大学人文社会科学部（サウス・ウェールズ）、クラクフ教育大学歴史・政治学部（クラクフ）、それに韓国の漢陽大学人文研究所である。林志弦は、この漢陽大学の東欧史の教授であり、プロジェクトの代表であるが、最近では民族主義や国民主義に対する歯に衣着せぬ挑発的論客として知られている。とくに 1999 年に公刊された『民族主義は反逆だ』は、それにたいして雑誌の批判特集が編まれるほどの反響を、大韓民国の論壇に巻き起こすことになった。

今回の『強制と同意』プロジェクトは、全体主義的専制支配とそれに対する民主主義的抵抗という従来の図式では捉えることができな

い新自由主義的な統治における「合意の独裁」を、グローバル化する状況のなかでいかに概念化するかという林氏の年来の課題に深く関わって構想されている。もちろん、民族主義一般に対する非妥協的な批判は、ある文脈では禁忌破りのような効果を招いたり、実際の政治的な状況のなかで、意図したこととは反対の政治力学に利用されたりしかねない。とくに民主化闘争の長い歴史を持つ韓国社会で、民主化運動やその系譜をひく運動のなかにある民族言説をことさらに批判することは、ときには、民主化によって脅かされている勢力の言説に同調する姿勢と一見混同される危険性すらある。林志弦は、あえてそうした薄氷を踏むような地帯を進んできていると言えるだろう。次の論文は、2003 年 10 月 24 日と 25 日にソウルで行われたプロジェクトのための第一回国際会議の論点と成果について、林自身が総括した論考である。この会議には、日本からは、東京外国語大学の中野敏男、篠原琢、千葉大学の小沢弘明、大阪大学の水野博子に参加して、それぞれ報告や討論を分担した。